身体をくぐった言葉の力

出席者　有川知津子・鈴木千登世
松尾　祥子・大松　達知

大松　第七十回O先生賞の選考座談会を行います。昨年までの数年間は、コロナのこともあり、メールを回してゆく形でした。が、今年は、コロナ後の新形式である、Zoomを使って開催しております。順位表では四人の選をすべてそのままお示ししてあります。

それでは上位の作品からご意見をいただきます。三十首の連作をどう作ってゆくかなど、今後の作歌活動につながる座談会になったらいいですね。

上位五篇をめぐって

では、上位五篇の作品から。まず四人の合計得票が一番多い**印出美由紀さんの「敦盛」**について、点数の多い人からお願いします。では有川さんから。

有川　はい、印出美由紀さんの「敦盛」は現代を生きる「おばさん」、これは歌の中で使われているワードですが、「おばさん」が寿永二年の若武者敦盛を舞うという一連です。中心となるのは、舞台上の場面です。そのなかでも私は〈けふわれに降りまさざる敦盛をひとしほ恋ひて扇を閉ぢぬ〉この歌を軸に読みました。結局敦盛にはなれなかったと感じながら扇は閉じられます。無念さが滲みますが、同時に充足感も伝わってきます。よい歌です。この重々しさは、口語ではなかなか出ない、文語のよさが巧みに生かされています。

また扇という小道具が一連に統一感を与えてもいます。先に挙げた「けふわれに」の歌の前には、扇を開く歌と扇を上げる歌があります。〈張り詰めた舞台の上の空気圧を馬手の扇でゆつくりひらく〉そして〈修羅扇を開きて上ぐる曲なかば浪はたしかにわが背を越えつ〉です。このように、扇が異なる動きで詠まれたところもよいと思いました。舞台上で衆目を集める扇が、歌の中でもよい働きをしています。

舞台を降りてからの〈正座して師のねぎらひを聞くここは大き球弧の突端である〉の歌は、「球弧の突端」という句に宇宙的な壮大さが感じられ、それは能の世界観にかようように思います。

鈴木　能の世界とこの作者の生きている現代とを往復する、虚実を行き来する構成が非常に巧みだと思いました。能舞台のクライマックスに向けて高まってゆき、格調の高い、韻律の美しい詩的世界が広がっていると思いました。私も〈本番のまぎは切り戸で渡されし修羅の扇の日輪と波〉の修羅扇の歌に注目しました。そ

して波に関わる〈足拍子踏めば床からからだだゆう伝はりのぼる波のごときが〉から有川さんの挙げられた「修羅扇を開きて」までの歌に舞台の緊張と弛緩の身体感覚と言うんでしょうか、舞台を私がそのままいて見ているような、実際に舞っているのが乗り移っているような、そんな感覚を覚えました。

特に最後の「浪は〜越えつ」の歌は舞っている敦盛自身が波を呼んだという幻想とそれから舞い手としての作者の感じた幻想、映像的で不思議なリアリティーを感じました。

松尾　実際に自分の舞っている感覚、自分の体から発せられた言葉で歌を作っていて、「敦盛」の演目に関しても自分の体を通して歌っている歌が良いと思いました。あげていただいた歌を含め、心に残る良い歌が沢山ありましたが、じゃあなぜ十点ではなかったかというと、読みに迷った歌がありました。〈憂ひごと数珠玉入れに蔵ひおき能の舞台に立つ日を迎ふ〉と最後の〈ふさばなの令法の揺るる道を来てロザリオ一環唱へむとする〉にロザリオの描写が出てきます。歌が悪いわけではなく、ロザリオに日常の自分を預けて舞台に臨むことは分かるし、構成も考えてのことと思いますが、能の世界の一連に別の要素が入ってしまい、そこが惜しいと思いました。それで一位に推しませんでした。

大松　一生に一度でも能舞台に立って何かを演じる人は少ないはずです。その中の貴重な一人として、演者の側からの心理を詠むことには大きな価値がありますね。そして三十首詠として、テーマが決まっている強さもあります。舞台が始まる前から終わるまでの、静かさから盛り上がりまでの心理の変化をいくつもの角度から描いています。また、「敦盛」、あるいは能舞台だけでなく、あくまでも自分が中心になって、自分に引き付けて詠まれているのもいい。この方は、対象が能舞台でなくても、スポーツであろうと音楽であろうと、同じような強度で歌を

第70回 O 先生賞優秀作品順位表

（1位作品を10点とし、10位作品を1点とする。）

題名	作者	有川	大松	鈴木	松尾	合計	順位
敦盛	印出美由紀	10	8	7	7	32	1
キャタピラ	白川ユウコ	5	5	10	6	26	2
びばのん	清水　美里	9	6			15	3
時間に触れる	真島　陽子	8	4		3	15	3
言葉はちから	斉藤　淳子	6			8	14	5
そこにねし人	吉田　史子			4	9	13	6
夏男	三沢　左右		2		10	12	7
同時代のこと	人見　江一		3	9		12	7
逃げる	礒川　朋美		10	1		11	9
暁雲	柴田　佳美		9		2	11	9
文系気質	水辺　あお	7	1	3		11	9
背泳ぎ	松下　誠一	2	7	2		11	9
七つの頃へとおりやんせ	奥　呂美生			8		8	13
「砧姫」筑前国続風土記拾遺を読みて	末広　芳子			6		6	14
私のパワースポット	関　裕子				5	5	15
加計呂麻	藤田　邦彦			5		5	15
ひかり	下城　公秀	4				4	17
夏雲高し	北条　忠政				4	4	17
夏了る	戸田　道子	3				3	19
男の子受く	持木美智子	1				1	20
ボンタンアメ	荒巻　睦代				1	1	20

有川知津子氏

作れる人でしょう。一つの方向からだけでなく、工夫を凝らして重層的に対象とご自分を詠まれている。連作のお手本のようです。

＊

それでは続いて**白川ユウコさんの「キャタピラ」**について。10点を入れてます鈴木さんからお願いします。

鈴木　はい。この一連の作品は、固有名詞の力が非常に生きていると感じました。世田谷、下高井戸、渋谷などの多くの地名、西友、丸井、マツモトキヨシ他の店名、また数詞など言葉の裏から物語や気分が立ち上がる言葉が大変上手に使われています。友人や恋人との若さゆえの行動など学生時代の東京の下宿先での日々が歌われ、もう戻らない青春の日々への郷愁が心に残ります。

〈キャタピラよまわれユンボで均すべしだれにも話していない話〉更地となったかつての下宿先。過去は甘酸っぱいだけでなく苦くもあり、どこまでも一人で持っていく覚悟のようなものを感じました。〈おもしろいあたし絶対なにものにもなれないなんておもわなかった〉には、わけのわからない自信と希望ではち切れそうな青春を言う背後にまだ「なにもの」、望む自分になれていない不全感が滲みます。他にも居場所のない孤独感を感じる歌もありました。

これらの作品によって青春の甘やかな思い出に止まらず、そこに現在の自分に対する感傷というか、現実に繋がるものを感じたのが私がこの作品を評価したポイントです。

松尾　学生時代の思いを回想で歌うと現在とのつながりがなくて弱くなりがちですが、この作品は過去と現在がうまく作用して、回想だけに終わっていないのが良いと思いました。〈うとうととこたつにふたりとおい愛とっくにとりこわした恋です〉は、まったりとした言葉や句またがりを用いながら現実に近づけて歌っている。そんなところの過去形、現在形、口語、文語の使用がうまいなと思いました。〈建物は建物の墓建物の死を敷いて建つ都会のビルは〉は建物と「建つ」を繰り返しながらそこに以前とは違ってきた都会を見る目があって、過去と現在というのをうまく歌っていると思いました。一か所「超えたらん」が気になりました。文語なら「超ゆらん」です。口語なら「超えただろ」「超えたかな」などでしょうか。

有川　〈更地にはなにがあったかにんげんの記憶ほわほわたんぽぽの花〉一首目の歌よいと思いました。この歌は、最後の〈青春は更地とされて家建ちて白髪を染めてわれが見にくる〉と呼応していて、一連の構成が意識されていることも窺わせます。〈飛行機で恋人が来た夏の夜は窓あけていてすみませんです〉などもよいと思います。「すみませんです」は、実用文としては訂正の入る使われ方ですが、これがこの歌ではおもしろくてよく生きています。すまない気持ちをさらに丁寧に表現したいがための＋「です」という形ですね。

このような個性の際立つ歌がありますが、一方で「うとうとと」の歌など、意味が取りにくい歌があり、惜しいと思い

ました。

大松　勢いがあって、思い切りのいい歌で他のどんな人とも似ていない。もう名前がなくても作者名がわかるほどです。それは歌人としてほんとうに価値のあることです。ただ、残念ながら、思い出を詠むのは歌としてちょっと弱くなるんですよね。それから言葉もとても元気な印象なんですが、悪く言えばとっちらかった印象とも言えます。言葉をもう少し落ち着かせても歌の良さは十分に残るはずです。〈プリムラの庭をみていた濡れ縁にデリーで買ったサンダル置いて〉など、ふとした歌が全体を引き立て巧みです。ただ、後半はちょっとありがちな青春像に回収されてしまった感じでした。けれども四人の点が集中する魅力的な作品です。それは証明されているのだと思います。

鈴木千登世氏

＊

得票3番目の**清水美里さんの「びばのん」**について。有川さんからお願いします。

有川　まずタイトルがドリフの「ビバノン音頭」のビバノン由来と思い、楽しいなあと思いました。ですが読むと想像していた雰囲気はなく、今の心身の状態が客観的に捉えられた一連でした。深刻な情況を深刻に表わさないところに特徴があります。〈診断書、休職届　名も知らぬ人らの電子印捺されゆく〉は仕事から離れる手続きの無機質さが「電子印」に託されています。〈なおしてもなおしてもなおずり落ちてくる肩紐のまま隅田川〉は「肩紐」が落ちてくるほどに体重が減ってしまったのでしょう。現実はもっと生々しくて辛さがあるはずですが、読者に伝えようとする時にそれは抑えられています。

〈びばのんの語源は不明びばのんはバベル崩壊以前のことば〉がタイトルの歌。「バベル崩壊以前」とは、誰もが同じ言葉を使っていた古い時代、と読みました。この歌は先に挙げた電子印に象徴される現代と対照をなしています。他にも〈会員制スナックちはるのドアが開きわずかに覗くちはるの箒〉などに注目しました。全体に、詩へ昇華する意識が感じられ引きつけられました。

大松　〈寿限無寿限無やれば五分で済むことの海砂利水魚のめんどくささよ〉など体調不良の歌があり実際休職をされるという歌があってはらはらさせます。が、全体的なトーンは風通しが良い。ナンセンスさもありながら、あまり深刻に詠まず、現実的に歌を継いでゆくのが良かったです。

〈萩の湯の丸い鏡の内側のふたつの乳房だけが平和だ〉など身体について、歌としてのインパクトを出しながら自分の状況を出すというところもいい。歌人としての覚悟でしょうか。自分を通して現代を詠んでゆく歌ですね。他にも、短歌でしか掬われないシーンもよく見ていて、飽きさせない一連になっています。この方向、好みです。

鈴木　体の不調を抱えながらそれを感じさせないような歌もあって惹かれました。〈あぁ今日はりんご風呂の日あちこちでりんごの丸を包む手も丸〉は大変優しくて、りんご風呂の温かさとか香りとか丸

松尾祥子氏

く結ばれた手とかそんなものが見えてくるいい歌だと思いました。

松尾　はい、もう良い歌が出ています。他にも、〈言いかけた「かわいそうに」をひっこめて「心が痛む」に心がなおす〉などとても深く歌われているし「びばのんの語源は」の歌も良いのですが、ドリフの歌が浮かんでしまうと、緩和するようにという意図かもしれませんが、あの明るさと歌の内容との落差が大きすぎました。

＊

大松　はい。次は、同点3位の**真島陽子さんの「時間に触れる」**です。有川さんは8点を入れてます。

有川　はい。家族との日常を中心に、折々の大事なことや大切なものが丁寧にすくい取られています。状況を分からせるための説明的な歌が少ないのもよいところです。〈亡き義父の席にすんなり短パンの次女が座って空く次女の席〉この歌によって夫の両親と同居していることが分かるのですね。内容も、義父の空いた席に次女が座る、すると次女の席が空く、そこにはまた誰かが座るのであろうし義父の席に座った次女もやがていなくなる、こうやって家系とか命とかがつながっていくということが暗示されて深みがあります。〈八人の孫と写真を撮りし父ひとり離れて遺影決めおり〉からは一人で写真を選んでいる父を遠くから気遣っている様子が窺われます。この眼差しであらゆるものが捉えられているように思います。家族だけでなく、自然の景物にもこの眼差しが注がれています。二首目の〈やわらかきほうれん草の茎引けば出せぬ手紙を破る音する〉など、注目しました。

松尾　家族と一緒に住んでいて、義母と次女との感じがとても良いのですね。他にも〈馴染めずに職を離れる若者の心よ床のクリップひろう〉は退職の若い職員の心に思いを馳せていて、自分の子供だけじゃなくて、周りのものにつながっていく歌などもあっていいと思いました。けれど〈棟梁の伯父は空から家々を見ているだろう出棺の朝〉は祖父が引き取った子に棟梁を任せたその伯父だと思うのですが、誰の出棺だろう？亡くなった伯父が自分の出棺を魂が空に上がって見ているのか、それとも直前に「遺影決めおり」の父の歌があるので父の出棺かなとも思うと読みに迷いました。家族を見つめる目に同感で、その中で生活実感が捉えられてとても良いのですが、登場人物が多かったかなと感じました。

大松　有川さんのあげた「亡き義父の席に」の歌、いいですね。卑近なところを詠んで、時間的なスケールが大きい。〈退職の若き職員じゃりじゃりの不満まぶしたドーナツ配る〉これは、善人登場でないのがいい。一連としては力作ですが、そんなに力が入っているようには見せない作りです。

ただ、さらにその上のレベルにゆくためには、従来の短歌の言葉の枠組みの中で言葉を組み合わせるのだけでは物足りない。白川ユウコさん、清水美里さんのように、短歌としての先入観を取り払って、もっとぶっ飛んでみると新しい歌境にたどり着くかもしれません。もちろん、

個々の作者の特長はありますが、自分の枠を広げてゆくのも楽しい作業ですよね。

鈴木　〈自己肯定しない、できないいのちあり　ねじれて伸びているチューリップ〉を次女のことを詠んだ歌だろうと読みました。傷ついている次女に何も言わず寄り添うという歌も心に残りました。娘を思う気持ちが通底している一連と読みましたが、やはり登場人物の多さに迷いました。

＊

大松　それでは次に**斉藤淳子さんの「言葉はちから」**に行きたいと思います。松尾さんが8点ですね。

松尾　この一連は教師としての日常、それから地元長野のリニア工事の話、豪雨水害のこと、それから、還暦を超えた年齢での忘却とか死というものが近づいたような感じなどの歌を詠みながら、明るくて健康的な感じに惹かれました。

生徒、教師としての歌でいくと〈デジタルの教材使ふ生徒らをとほく見てをりふるい黒板〉は古い黒板が、デジタルの教材を使う生徒らを遠く見ている、そういう捉え方に惹かれました。リニアの歌では〈風景にふかく繋がる人間のこころ揺さぶり開発すすむ〉に静かな批判というものを感じました。〈正体のわからぬものに急かされてウォーキングに出る雨空の下〉の歌は年齢の実感がすごくわかるんです。ウォーキングに出るのはある一定の年齢以上になると、やりたさよりも急かされて、やってないと安心しないっていう微妙な年齢意識が出ているという気がしました。

有川　〈生まれたるばかりの雲かあさかげに銀糸をまとふひと筋が見ゆ〉の湛える詩情はこの一連の導入にふさわしいと思います。教職の歌にもよいものがありますが、自身の身体の老いが意識されているような歌に、より引きつけられました。〈丹念にスクワットする還暦を越えて上りも下りも怖い〉はスクワットの上下運動のリズムが歌のリズムに再現されているところ、巧みです。〈たひらかな水にオールとなる腕（かひな）この身ひとつを浮かべてあそぶ〉からは年齢による静謐さ、健やかさが感じられます。

〈醤油派を返上しさらり塩をふる梅雨の晴れ間のサニーサイドアップ〉はサ行が効果的です。これは無意識かもしれませんが、「さらり塩を」の「さらり」の音がサラリー（salary）にかよい、言葉を楽しんでいるような遊び心が感じられました。

六位から九位の作品について

大松　ここからは、六位からの作品を巡って評をいただきます。まずは**吉田史子さんの「そこにゐし人」**について。

松尾　〈入院の夫の靴を磨く朝すこやかに戻るを疑はざりき〉は検査入院で入られたご主人をそのまま見送ってしまったという、思いもかけない死の後の残された者の時間というのが丁寧に詠まれています。

〈棺のふたずらして額に口づくるわたしを見るな　明日はお別れ〉は棺に入っている亡骸となった体の「額に口づく

大松達知氏

る」、これがこの世の体との最後のお別れという切ない場面が出てきます。その後注目したのは〈パピコ食べる相手がゐなくなつちやつてわたしはひとり五月の庭に〉。パピコってパキンと割って二人で食べるので相手がいないと本当に困るんだけれど、その「パピコ」っていう音が逆にほのぼのとしたものを感じさせることに余計に寂しさがツンと来ます。〈死を賭して君がわたしに残しくれし「時間」と思ふ目を閉ぢおもふ〉はリフレインで詠んでます。「死を賭して残してくれた時間」、それで自分が生きていこうという、そんな力強さでまとまっているところにも惹かれました。

鈴木　突然夫を失った悲しみの中、傷口が開いたまま整理されていない心情が胸に響く一連だと思いました。〈家族よりあなたが抜けてわれと子は遺族となれり喪の服を着て〉の「遺族となれり」という表現に実感の湧かない感じが伝わります。演じているかのように喪服を着ている、と。そのような感覚で読みました。〈さうかもうあなたはゐない　きゆるきゆると回転椅子はまぼろし乗せる〉いたはずの人がいない。いないというのは、実は逆にその存在が強く意識されることでもあると思います。何度言い聞かせても納得できない。でも納得するしかない。そこに幻の夫を見てしまう……。ぽつんとつぶやくような口語表現が切なく、胸を打たれました。

一連の最後の歌に生きる意志が詠まれ、救いのようなものを感じながら読みました。

＊

大松　三沢左右さんの「夏男」。松尾さんが10点ですね。お願いします。

松尾　面白さを買いました。〈京都より妹夫婦姪二人父と母来る八月十四日〉という歌があり、それが〈「台風は午後に来るつて」昼食を終へてはやばや六人は帰る〉と結局台風であっという間に帰ってしまうんですね。その後の〈四歳と二歳の姪をあそばせる場所は調べた、しらべてはゐた〉〈おそらくは我が誰だかわからないままに帰つてゆきし姪たち〉など現実には会って帰ったっていうだけなんだけれど、その心の中で起こっている思い、歌わなければ出てこないようなことが三十首の連作という形の中で出てくる。〈暴風雨、たぶんたにしのたまごらは無事でゐるのだらう濡れながら〉は冒頭の田螺の歌と呼応していて、田螺の卵にその何日間かの心を合わせるように歌っています。〈大宇宙の大八車ころがして夏男ゆく紺碧の空〉は大柄な歌で、「大宇宙の大八車ころがす」は太陽のことかもしれない。紺碧の空を行く夏男。タイトルもまた不思議な感じで、連作に現れている作者の心の、家族との距離感などが面白くて、思い切って一位に取りました。

大松　一首ずつは、すっきりしたいい歌が多かったです。けれど、連作としての盛り上げ方がイマイチでしたかね。家族が遠方から来たと言うので何かあるのかなと思わせておいて、何も大きなできごとはない。あるいは、彼らは帰路に台風に巻き込まれそうになるけれど、事件は起こらない。ちょっと肩透かしをくらうという感じでした。

現実的には安全第一ですが、短歌としては、ある程度ドラマチックなものを期待しますよね。また表現に遠慮がある印象もありました。意図的でしょうけれど、賞狙いの場合は、もうちょっとキビシク攻めてもいいかなと。特に好きだったのは、〈検索をしてをりダルシマーといふ楽器の音がわからなくつて〉とか〈ああこれか。子供のころの押し入れの内から

ひびくやうな音、おと〉とか。具体的な核から状況が染み出してくるようなうたです。

＊

次は**人見江一さんの「同時代のこと」**です。これは9点を入れている鈴木さんにお願いします。

鈴木　一九八九年の十一月に起こった坂本弁護士一家殺人事件から三十三年。短歌の、記録としての側面を感じさせる一連です。冒頭の〈拉致なのか、失踪なのか、忽然と姿を消した坂本一家〉は畳みかけるリズムに切迫感があります。

このような事件を伝える歌なので、どうしても説明的になってしまうというのはあるんですが、友人として、理不尽な暴力で閉ざされてしまった一人の人間の人生を、生きた証をとどめたいという強い思いを歌の背後から感じ、胸を打たれました。

その意味で〈閉山後過疎化の進む夕張を学びの場とするワークキャンプは〉〈イチゴ食べすっぱい顔をしたきみの写真をしおりの表紙に使う〉など都子さんの人間性が浮かび上がる歌に注目しました。

最後に〈「同時代のこと、目を背けずに見てほしい」まっすぐ目をみて話したきみは〉は彼女の思い残した志に重ねて、今の、この同時代を見てほしいというメッセージを私たちへ伝えたいという歌だと思いました。短歌の力を信じたいという作者の祈りを感じました。

大松　連作でならではの作品で、力強いドキュメンタリーです。自分と関係があった人の事件。その緊張感が、歌を塗り重ねていくうちに高まっていく。〈犯人を捜査するより弁護士の交友関係あたる県警〉など、警察に対して何か言いたいことがあるような導入がある。しかし、その方向には行かず、都子さんとの関係を詳細に描いているのがいい。〈ゲレンデの草刈り終えて夕張のメロンほおばる夕陽見ながら〉は、普通の人が人生の流れの中でとんでもない事件に巻き込まれて命を失ってしまうこととの落差がある。レトリックや言葉のおもしろさを抑えて、短歌の記録性に重みを置いた、力強さがありました。こういう歌も読む価値が大いにあります。

＊

大松　続いて、九位が四人です。まず**礒川朋美さんの「逃げる」**を私から。

生活の中に、事実性よりも「詩」を発見してゆく視線があります。言葉に飛躍はありつつ、現実の手触りも濃くある。ちょっとした閉塞感もある。でも、そんなに深刻には見せず、隙間を設けて風通しをよくしてある。〈何一つ未来は見えず最善を尽くして今夜は肉ジャガにする〉そんなにがんばる料理ではない。ですが、それをこうユーモラスに言うところに実生活と詩が入り組む愉快さを見ました。

〈哺乳瓶叩き割りし日の傷の五ミリ隣をまた浅く切る〉は、ちょっと深刻ですけれど、それをリズムで乗り切ってゆくようです。〈こめかみにバナナを当ててウルトラの母になつても力は湧かず〉は、滑稽な格好をしてることで読者もちょっと救われます。「力が湧く」ではフツウでつまらないですからね。

鈴木　豚玉とか肉ジャガとかリアルな日常の感覚が魅力です。勢いがあって、骨太。切り取られた場面はどれも生き生きとしているんですけれども〈横向きに子らが寝るので横向きにわたしも寝るが足が寒いな〉などの子どもを詠んだ歌にある怖れと疲れの感覚。子どもといる幸せはよく詠まれるんですが、作者のこの感覚が見えない未来の閉塞感とともにこの

一連の底に流れていると思いました。

大松　では、**柴田佳美さんの「暁雲」**です。主婦の怒りや夫婦関係をうまく行かせようという気持ち、人生の半ばの揺らぎみたいなもろもろを、詩の言葉で掬おうという意思が良かったです。〈リビングのシーリングファンがかきまぜるくぐもつた胸底のこゑ〉や〈怒らない女でゐると決めてをりひとりの男愛し抜くため〉など、逡巡がありながら、前を向いて生きようと揺れる心が汲み取られています。〈筆圧の軽やかな夫のくづし字に似てるとおもふ夜の愛撫は〉など、セクシーな歌もいい。

また日常詠も、一方的な方法でなく、迷いながら言葉を掘り起こす姿をそのまま歌にぶつけた感じがすばらしかった。スリリングな歌とは、こういう作品のことなんだなと思いました。

松尾　専業主婦としての、夫婦の葛藤やその揺れる心みたいなのを詠んだ一首一首が上手いなと思いました。〈安定の中におさまり反復の家事の重さにぐらぐらする肉〉という体を通した、肉体感覚を伴った歌い方がいいなと思いました。〈締めきつた家の空気は饐ゑてゐて枇杷の色した常夜灯〉など結句が五音っていうのがいくつかあって、これはあえて五音にして不安感を助長するリズムでしょうか。それでいながら最後は綺麗な歌でまとめて魅力のある一連でした。

大松　**水辺あおさんの「文系気質」**。7点の有川さんからお願いします。

有川　日常に取材し、多様な歌が並ぶ一連です。原則として「今」を詠もうとしていますが、一首だけ〈あなたにはこれしかないと鉛筆を研いでもらひし十八の冬〉という過去の歌があり、注目させられました。恋の歌であり、将来を決定づけた瞬間の歌でもあります。「鉛筆を研」ぐという具体には文筆業が暗示され、タイトルへつながります。甘くなりがちな恋を「冬」で収めたところもよいと思いました。

〈夏の夜の夢の城にて再会すマティスの金魚となりし亡き猫〉の発想の面白さや、多様な歌をまとめあげた最後の〈水路より田に流れ入る水の音真夏の午後のしづけさに溶く〉などにも注目しました。一首で読める自立した歌が多かったことが評価につながりました。

鈴木　いろんな歌の中で〈テレビ見て新聞読みてスマホ見るどこかでオオタニ勝つてをらぬか〉などそこはかとなくユーモアを帯びている作品に魅力を感じました。結果は同じはずなのに「どこかで勝つてをらぬか」と平然と詠んでいるところにほのぼのとしたおかしみがあります。また〈どの人のエゴを許すか許さぬか多数派閥のエゴにて決まる〉という権力に対して物申す歌。感情的にならずアイロニーが効いています。社会への眼差しの一方で〈旅の部屋電気つければわが影が黙つて居たりわれのふりして〉のような内省的な陰影のある歌も魅力的だと思いました。

大松　最後に**松下誠一さんの「背泳ぎ」**。これ私が点入れてます。作者は二十歳の大学生。文体がユニークです。

具体的に物が核としてあって、そこからシーンが立ち上がってゆく。〈人混みの土手の向こうで打ち上がる花火を聴きながら食うきゅうり〉〈野良猫の逃げていかないぎりぎりに止まって日本語のごあいさつ〉花火に行ってもきゅうりに視点を当てる。そこがいかにも現代の短歌っぽい。短歌でこそ拾えるシーンが満載でした。佐太郎っぽいと言えるかもしれません。

有川　「野良猫の」の歌は、私も印がついています。他にも〈高校の頃と変わら

ず遅刻魔の僕らが狂わせていく予定〉。句割れ句跨りの使い方が巧みです。〈癇癪でなんとかなったあの頃の痕跡に貼られるカレンダー〉は、カレンダーの背後の壁に自分の歴史があるという、少し翳りのある歌になっています。気持ちがどこにあるのか伝わってくるこういった歌がもう少しあるとよいと思いました。

鈴木　若者らしい感性が眩しい歌がたくさんありました。取り留めがないようで、でもリアルの手触りがある。短い映画を見ているような魅力を感じました。最後の〈廃線のふみきり閉まることのなくもっかい好きになってください〉の歌の唐突な「もっかい～」にギリギリの思いが伝わってきて好感を持ちました。

選考を終えて

大松　今回の選考を終えて感じたことを総評として話していただき、誰を受賞者として推すかも述べてください。

松尾　三十首の連作となると、歌一首一首の上手さだけではなく導入部から最後のまとめに行くまでの一連として詠むこと、前の歌が次の歌にどう作用したか、写真で言えばグッと画面を近づけたり遠ざけたりなど同じパターンではなく詠むことが必要だというのを感じました。

　点数が一番入っている「敦盛」は、やはり自分がそれを舞っている、自分の体の感覚を通して表現している。さらにテーマ性もあるところが良いと思いました。

鈴木　応募されたどの作品も迫ってくるものがある力作揃いでした。日頃のコスモス誌とはまた違う作品だったりテーマ性だったりで、読むのは楽しく選ぶのは苦しく、何度も選を入れ替えました。惜しみながら選ばなかった作品が順位表に挙がっていてやはりと思いました。

　一位の「敦盛」は能の舞台の最初から終わりまでの心情、それが臨場感を持って伝わってくる、映像としても見えてくるというところで非常に優れた作品だと思いました。

有川　一連の統一感とその中での一首の独立性を意識しながら選考にあたりました。テーマとなる大きな出来事があれば一連としてまとまりやすいかもしれませんが、日常の、折りに触れて詠まれた歌であっても一つの雰囲気をもってまとめることができていたら、やはり訴えてくるものがあると思います。

　今回一位に推した「敦盛」には、身体をくぐった言葉の強度というものをあらためて考えさせられました。言葉の強さが感じられる一連でした。

大松　歌の作り方には、正解はありません。でも、歌人たちに共通する評価軸はある。それは何なのだろうか。事件性のある歌、自分の中へ分け入る歌、日常をさらっとさらう歌。様々な方角からの歌があることで全体が豊かになり、一首ずつが際立ってくる。そういうものを目指して作っていけばと思います。取り上げられなかった作品にもいい歌は多かったです。「コスモス」の層の厚さを感じた選考過程でした。

　それでは四人が上位に推している**印出美由紀さんの**「敦盛」を今年のO先生賞に決定してよろしいでしょうか。

松尾、有川、鈴木　はい、結構です。

大松　ではそうします。みなさん選考、座談会ありがとうございました。